

# バドミントン競技における 日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの分析 ——男子ダブルスの分析——

Analysis of Tactics and Score Pattern of Junior Badminton Player  
in Japan, Korea and China  
——Regarding MenDoubles——

北 村 優 明	竹 田 唯 史
Masaaki KITAMURA	Tadashi TAKEDA

## I は じ め に

バドミントン競技は1893年に英国において「ザ・バドミントン・アソシエーション」が創立され、ルールが確立された。その後1899年に第1回全英選手権が開催され、1934年国際バドミントン連盟の設立を経て急速に普及していき、1992年バルセロナ・オリンピック大会に正式種目となった。現在ジュニア大会からシニア大会まですべての世代で多くの競技者参加による全国大会・国際大会が盛んに開催されており、生涯スポーツ競技として親しまれている。

筆者らは平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」（「学術フロンティア推進事業」）における「北方圏における生涯スポーツ社会の構築における総合的研究」プロジェクトの競技者育成研究分野において北海道体育協会並びに北海道バドミントン協会と共同研究を図り、バドミントン競技における「トップアスリート育成の指導システム構築に関する実践的研究」として、競技者・指導者育成に関する指導プログラム完成し、競技力向上に向けてスポーツ振興を図るための研究を進めてきている<sup>5), 6)</sup>。

このようなバドミントン競技の研究に関しては、ナショナルチームメンバーの生化学検査をしたものや<sup>4)</sup>、プレーヤーの動作軌道を明らかにしたもの<sup>1)</sup>、そして運動特性を生かしたコート内トレーニング法を提言したもの<sup>3)</sup>などがある。ゲーム分析に関するもの<sup>2), 7), 8)</sup>として、古川ら（2004）のものがあるが、バドミントン競技におけるゲーム分析に関して、また研究の余地があると考ええる。

そこで本研究は、日本・韓国・中国の三カ国におけるナショナルジュニア選手の戦術・得点パターンの特徴を明らかにすることをねらいとし、今回は特に男子ダブルスのサービスにおける戦術・得点パターンについて着目し分析することを研究目的とした。これにより「北方圏生涯スポーツ研究センター」の研究プロジェクト・競技者育成研究の目的でもある北海道のジュニア強化指定選手育成に貢献することが出来る。

## Ⅱ 研 究 方 法

対象は、平成17年8月23日～29日に札幌市において実施された第13回日・韓・中ジュニア交流競技会北海道大会における男子ダブルスの「日本対韓国」、「日本対中国」、「韓国対中国」の3試合における各第1ゲームとした。選手は、各国のジュニアナショナルチームの代表である。それぞれの試合をコート両側後方上部よりデジタルビデオカメラにて撮影した。分析方法は、映像分析ソフト「DARTFISH TEAM PRO」（ダートフィッシュジャパン社）を使用し、撮影した画像を取り込み、タギング（ゲーム分析機能）を用い試合中の各ショットを入力し、プレイコートを9つのエリアに分割して（表1）、その数を集計し分析した。

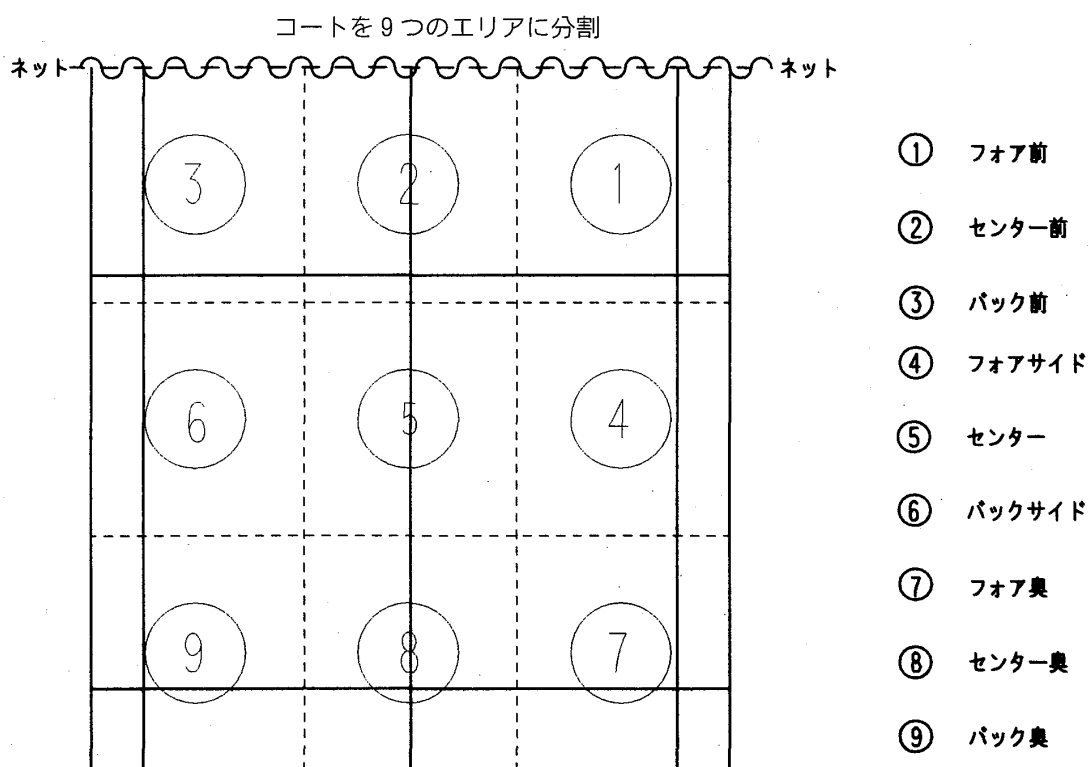


図1 コート割付図

## Ⅲ 結 果

### （1）サービスの戦術分析

3国のそれぞれの対戦におけるサービス分析の結果を表2から表4に示した。縦軸の上段（1～4）にはストローク結果を示し、下段（1～9）には配球のコートエリアを示した。横軸はラリー数を示した。ラリー数の1は、サービスサイドのサービスを示し、2はレシーブサイドのサーブレシーブを示す。3はサービスサイドの2回目のストロークを示す。すなわち、1－3－5－7は、サービスサイドのストロークを表し、2－4－6は、サービスサイドのストロークを示している。表中上段の「ストローク結果」とは、横軸の1から7のラリーにおいてラリーが途切れた際のショットの状

況を示している。すなわち、「エース」とはシャトルが相手エリアのフロアまたは相手ボディーに直接触れた状況を言う。「フォルト」とは空振りを示し、「ミスアウト」とはシャトルが相手エリアに入らなかった場合を言う。また「ミスネット」とは打ったシャトルがネットに引っかかった状況を言う。そして、それぞれのストロークにおける回数を表示した。すなわち、「エース」においては、自陣サービスである1ショットにおいては、日本がエースを決めた数は1である。また、サービスレシーブである2ショットにおいては韓国はエースを1度決めたということである。2ショットにおいては韓国はエスを1度決めたということである。表中下段のストロークエリアはラリーが途切れなかった場合のシャトルの打たれたエリアを示している。

表2 日本対韓国 サービス分析

code	ストローク結果 項目	1		2		3		4		5		6		7		他	
		日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓
1	エース	1	0	0	1	3	0	0	2	3	1	2	0	2	1	0	5
2	フォルト	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	1
3	ミス(アウト)	1	1	1	0	1	2	2	0	0	3	0	0	0	1	0	2
4	ミス(ネット)	1	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	1	0	1	5	2
	計	3	1	1	2	4	2	2	2	5	4	2	1	2	3	9	10
code	エリア	1		2		3		4		5		6		7		他	
		日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓	日	韓
1	フォア前	11	11	2	0	3	2	2	2	0	1	1	1	1	1	1	4
2	センタ前	0	10	2	0	0	0	6	2	2	1	1	0	2	1	4	0
3	バック前	8	1	3	0	0	0	2	2	0	2	0	0	0	0	4	2
4	フォアサ	0	0	10	3	6	6	2	0	0	2	5	2	0	2	10	5
5	センタ	0	0	3	3	4	7	3	3	4	4	7	1	1	2	6	8
6	バックサ	0	0	7	10	3	3	4	3	2	4	2	2	2	6	4	6
7	フォア奥	2	3	0	1	3	5	3	1	2	7	1	2	2	0	1	4
8	センタ奥	1	1	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	2	2
9	バック奥	1	1	3	3	1	2	0	2	4	1	2	0	0	4	4	5
	計	23	27	30	20	20	26	25	15	14	22	19	8	8	16	36	36

表3 日本対中国 サービス分析

code	ストローク結果 項目	1		2		3		4		5		6		7		他	
		中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日
1	エース	0	0	0	0	2	0	0	3	0	0	1	1	2	1	2	6
2	フォルト	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
3	ミス(アウト)	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5
4	ミス(ネット)	0	2	3	0	0	1	0	1	3	1	0	2	0	2	1	2
	計	0	2	3	1	2	4	0	4	3	2	1	3	2	4	5	13
code	エリア	1		2		3		4		5		6		7		他	
		中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日
1	フォア前	11	10	1	0	0	1	2	0	1	0	0	0	2	1	5	5
2	センタ前	11	2	1	6	2	0	1	3	2	0	0	3	1	0	4	4
3	バック前	0	7	2	4	3	1	1	2	2	1	1	3	2	0	4	10
4	フォアサ	0	0	1	2	2	6	1	3	3	0	0	1	4	1	12	7
5	センタ	0	0	9	6	9	2	2	6	8	4	4	2	1	1	9	19
6	バックサ	0	0	2	7	3	4	3	7	2	2	2	3	1	6	4	11
7	フォア奥	1	1	0	2	4	0	0	3	2	2	3	1	2	0	8	0
8	センタ奥	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	0	0	2	1
9	バック奥	5	1	2	1	4	2	3	2	2	2	0	3	3	1	8	10
	計	28	21	18	28	28	16	13	26	22	11	11	18	16	10	56	67

表4 韓国対中国 サービス分析

code	ストローク結果 項目	1		2		3		4		5		6		7		他	
		中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓
1	エース	0	0	0	1	0	1	1	0	0	1	2	1	0	1	5	6
2	フォルト	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
3	ミス(アウ	1	1	1	0	2	1	0	0	0	0	1	2	0	1	4	2
4	ミス(ネ	0	0	0	0	0	0	2	1	2	2	1	0	0	1	4	4
	計	1	1	1	1	3	2	3	1	2	3	4	3	0	3	14	13
code	エリア	1		2		3		4		5		6		7		他	
		中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓	中	韓
1	フォア前	7	10	0	1	0	4	2	0	1	3	3	1	3	3	9	10
2	センタ前	4	6	8	6	0	2	0	2	2	3	3	2	2	1	14	9
3	バック前	10	7	1	1	1	0	6	4	4	3	1	3	2	2	15	13
4	フォアサ	0	0	1	5	7	4	3	4	4	0	3	5	2	0	8	14
5	センタ	0	0	9	4	5	2	8	2	3	4	3	5	4	3	26	30
6	バックサ	0	0	4	5	4	9	3	6	3	4	4	1	0	2	13	8
7	フォア奥	0	2	0	1	1	0	1	1	1	1	0	0	1	1	9	7
8	センタ奥	1	2	1	0	1	2	1	0	0	1	1	0	0	1	5	11
9	バック奥	3	0	2	0	2	2	0	2	3	2	0	2	1	2	11	10
	計	25	27	26	23	21	25	24	21	21	21	18	19	15	15	110	112

分析結果を論述する。


日本は対韓国戦においてセンターへのショートサービスが総サーブ数23本中0本（0%，表2下段 ■ 部分）であった。対中国戦においては総サーブ数21本中2本（10%，表3 ■ 部分）日本が相手センター前のショートサービスであった。これは、相手の鋭いプッシュアタックを恐れたためであり、消極的な戦術であるといえる。



韓国はサービスにおいて相手フォア前・フォア奥への配給が多かった。対日本戦においては総サーブ数27本中14本（52%，表2 ■ 部分），対中国戦は総サーブ数27本中12本（44%，表4 ■ 部分）であった。これは相手に対してセンターからの素早いアタックを避け、積極的な攻撃を封じ込める戦術であるとともに、同国の戦法の特徴として最終的な二段攻撃をバックサイドに集める狙いがあるといえよう。



中国は対照的に対韓国戦ではバック前・バック奥の配給が多かった。対韓国戦においては総サーブ数25本中13本（52%，表4 ■ 部分）であった。これは、先の韓国の戦術と同様に相手のセンターからの早い攻撃を避け為に行ったものである。対日本戦においてはフォア前・バック奥と対角に揺さぶりをかける戦術が目立った。総サーブ数28本中16本（54%，表3 ■ 部分）であった。これは相手を対角に揺さぶりをかけサービスに対する相手の読みを封じ込める戦術である。

## （2）サービスにおける得点パターン

日本は対韓国戦においてはラリーの序盤に相手サーブから始まる1-3-5-7ショットでは相手エースによる失点を2ポイント，又自陣サイドのレシーブから始まる2-4-6ショットミス（以下ミス）による失点は3ポイントであり，総失点15ポイント中5ポイント（33%，表2上段， ■ 部分）であった。対中国戦に於いても，相手エースによる失点を4ポイント，ミス

が4ポイントに押さえた(53%, 表3上段,  部分)という特徴を示した。これは, ラリー序盤でのミスが少なく評価できる。しかし前半での失点が少ないがラリーが長引いた場合失点が多いということがいえる。

韓国は対日本戦において相手エースによる失点は9ポイント, 自らのミスは2ポイントであり総失点13ポイントのうち11ポイントであった(85%, 表2上段,  部分)。対中国戦は相手エースはゼロ, 自チームのミスは3ポイントであり総失点4ポイント中3ポイント(75%, 表4上段,  部分)と非常に高い数値を示した。すなわち, 序盤での駆け引きでの失点は高く, その後のラリー後半でのミスがなく失点がない。

中国は対日本戦の相手エースによる失点は4ポイント, 自チームによるミスを3ポイントであり総失点7ポイント中7失点であった(100%, 表3上段,  部分)。対韓国戦は相手エースによる失点は3ポイント, 自チームによる失点のミスを5ポイントであり, 総失点15ポイント中8失点(53%, 表4上段,  部分)であった。このことから日本に対しては序盤の1~7ショットにおける失点がすべてで, それ以降のラリーが続いた場合は失点がないことがわかった。又韓国戦ではラリー序盤と後半においてもほぼ同じ失点であったことから, 韓国のバランスの良い総合力が勝っていたといえる。

#### IV まとめと課題

本研究は, 日本・韓国・中国の三カ国におけるナショナルジュニア選手の戦術・得点パターンの特徴を明らかにすることをねらいとし, 男子ダブルスのサービスにおける戦術・得点パターンについて着目し分析することを研究目的とし, 平成17年8月23日~29日に札幌市において実施された第13回日・韓・中ジュニア交流競技会北海道大会における男子ダブルスの「日本対韓国」, 「日本対中国」, 「韓国対中国」の3試合における各第1ゲームについて, サービスの戦術分析と得点パターンについて分析を行なった。その結果, 以下のことが明らかになった。

日本は相手の鋭い攻撃があるセンターへのサービスを避けるという, 消極的なサーブを多用していた。また, ラリー序盤の失点は少ないが, ラリーの長引いたときの失点は多かった。

韓国は相手のフォア前, フォア奥といった相手の積極的な攻撃を封じ込めるためのサーブを多用し, 相手の動きを崩していた。また, ラリー序盤での失点は多いが, 後半での失点が少なく, 高いディフェンス力があることをうかがわせる。

中国は対韓国戦では, 相手のバック前, バック奥が多く, 相手の積極的センター攻撃を封じていた。対日本戦では, 相手を対角に揺さぶり翻弄する攻撃的な戦術をとった。失点に関しては対日本戦においては, ラリー序盤の失点だけにとどめ, 後半のラリーでは圧倒的な力を示していた。

これまで中国は裾野の広い競技人口から, 身体能力の優れた選手を選抜し攻撃型といわれている, 一方韓国は強靱な精神力と持久性の高い身体能力備え守備型と評価されてきた。日本は攻守のバランスがとれた選手育成が評価されてきたが, 終盤の決定力不足が明らかになった。ネット・ハーフ・ドライブと攻撃チャンスを作りながらもエースに至らず, 韓国には繋がれ,

中国には切り返しのカウンターでミスを誘発されていた。以上のことから、日本のジュニア選手に対して、持久性と瞬発力の強化を図ることが必要と思われる。

北海道のジュニア強化指定選手育成のための提言として、今後の新ルールにおけるラリーポイント制の導入により1～7ショットの強化が必要とされることがわかった。北海道指定強化選手への指導法として、1) 1～7ショットのミスショット対策とエース獲得の為の戦術パターンの作成、2) 持久性と瞬発力の強化によるポイント獲得のための攻撃力の強化が急務といえよう。

#### 付記

本研究は平成16年～20年度文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」（「学術フロンティア推進事業」）の助成をうけて実施した。

#### 謝 辞

本研究を行うにあたり女子監督谷浦隆（札幌静修高校教諭）並びに男子監督井口一司（札幌第一高校教諭）両氏においては、分析の視点に関する助言をいただき、ここに記して感謝の意を表します。

#### 参考・引用文献

- 1) 福島健介，西原明法「テンプレートマッチングを用いたリアルタイム選手追跡システムの開発とバドミントンシングルスゲーム分析」、『電子情報通信学会技術研究報告』，第103巻143号，（社）電子情報通信学会，91～96頁，2003年。
- 2) 古川暁也，西山哲也，他「バドミントン試合中のストローク記録によるゲーム分析法」、『日本体育大学体育研究所雑誌』，第29巻2号，153～168頁，2004年。
- 3) 広田彰，他「運動の特性を生かしたバドミントン競技のコート内トレーニング法について」、『宮崎大学教育学部紀要』，宮崎大学教育学部編，101～107頁，1993年。
- 4) 泉圭祐，高橋勝美，他「高校バドミントン競技選手のゲーム中における運動強度」、『運動とスポーツの科学』，全国保健体育研究会，6（1），13～18頁，2000年。
- 5) 北村優明，竹田唯史「バドミントンにおける日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの比較分析」，日本体育学会第57回大会，弘前市，2006年8月。
- 6) 北村優明，竹田唯史「バドミントンにおける日本・韓国・中国のジュニア選手の戦術・得点パターンの比較分析（第2報－男子ダブルスの分析－）」，第46回北海道体育学会，札幌，2006年11月。
- 7) 鯨吉夫「バドミントン競技におけるゲーム分析」、『九州歯科大学進学課程研究紀要』，九州歯科大学進学課程編，15～33頁，1988年。
- 8) 関根義男「バドミントンのゲーム分析」、『日本体育大学紀要』，日本体育大学編集紀要委員会編，第17巻1号，55～62頁，1987年。